町 内 遺 跡 Ⅻ

大福寺境内遺跡（第３次調査）

― 保存目的の範囲内容確認調査 ―

２０１９

埼玉県比企郡ときがわ町教育委員会

町 内 遺 跡 Ⅻ

大福寺境内遺跡（第３次調査）

― 保存目的の範囲内容確認調査 ―

２０１９

埼玉県比企郡ときがわ町教育委員会

序

ときがわ町は平成１８年に旧玉川村と旧都幾川村が合併して誕生しました。町内には慈光寺が所有する国宝の法華経一品経や平成２０年に国指定史跡となった小倉城跡をはじめ、数多くの文化財があります。埋蔵文化財としては１００箇所以上の遺跡が分布しています。

この度、平成２８年度に実施した大福寺境内遺跡における保存目的の範囲内容確認調査の報告書を刊行することとなりました。大福寺境内遺跡は小倉城跡の正面麓に位置し、小倉城跡と何らかの関係があるものと推測されます。本書は、その関係性の解明および保存を図っていくことを目的とした確認調査で得られた成果を示した内容となります。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査から本書の刊行に至るまで、土地所有者はじめ地元関係各位、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課に多大なる御指導、御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成３１年３月

ときがわ町教育委員会

教育長　久米正美

例　　言

１．本書は、平成 28 年度に実施した大福寺境内遺跡（№41－076）における保存目的の範囲内用確認調査の報告書である。

２．大福寺境内遺跡は埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉 608 外に所在する。

３．発掘調査は、ときがわ町教育委員会が主体となって実施した。

４．発掘調査期間は平成 29 年１月 16 日から平成 29 年３月 31 日までである。

５．発掘調査、整理作業は、石川安司と杉山拓馬で行い、本書の執筆、図面編集、表・図版作製は杉山拓馬が担当した。

６．遺構実測及び空中写真撮影は㈱中野技術に委託し実施した。

７．発掘調査及び整理作業、報告書刊行に要した経費は、は文化庁国庫補助金、県費補助金、町負担金である。

８．本書に掲載した資料は、ときがわ町教育委員会が管理・保管している。

９．発掘調査から本書作成に至る間に諸機関から御指導、御教示、御協力を賜った。銘記して御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、ときがわ町シルバー人材センター

10. 発掘調査及び整理作業員

山崎尚子　吉野優子　山口信子　栗原靜子

凡　　例

１．挿図における方位は全て図中に示した。

２．挿図における縮尺は図中の()内に示した。

３．挿図中の遺構名称には以下の略号を使用した。

溝跡：ＳＤ

４．遺構断面図に表記した水準値は海抜標高を示し、単位はｍである。

５．遺物観察表の数値の単位は特別な表記がない限り cm である。

６．遺構断面図中のスクリーントーン（左下がり斜線）は地山を示す。

７．遺物実測図の表記方法で、須恵器については断面を黒く塗りつぶしている。

目　　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
　1　遺跡周辺の地理的環境……1
　2　ときがわ町の遺跡……3
　3　遺跡周辺の歴史的環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……10
Ⅳ　調査の方法と成果……14
　1　調査の概要……14
　2　遺構と遺物……17
Ⅴ　発掘調査の成果……25

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形図……２
第２図　ときがわ町遺跡分布地図……６・７
第３図　遺跡周辺の地形……12
第４図　既往の調査区位置図……13
第５図　調査区全体図……14
第６図　第１号トレンチ平面図／断面図……15
第７図　第２～５号トレンチ平面図／断面図……16
第８図　第１号トレンチ遺物出土状況図（１）……19
第９図　第１号トレンチ遺物出土状況図（２）……20
第 10 図　第２～５号トレンチ遺物出土状況図……21
第 11 図　調査区出土遺物……22

表 目 次

第１表　ときがわ町遺跡一覧表……８
第２表　調査区出土遺物一覧表……23・24

図 版 目 次

図版１　調査区遠景（東から）　調査区空中写真
図版２　第１号トレンチ空中写真　第２号トレンチ空中写真　第３号トレンチ空中写真
　　第４号トレンチ空中写真　第５号トレンチ空中写真
図版３　第１号トレンチ（西から）
図版４　第１号トレンチ出土遺物
図版５　第２号トレンチ出土遺物　第３号トレンチ出土遺物　第４号トレンチ出土遺物
　　第５号トレンチ出土遺物

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

当該遺跡は平成 22 年４月から実施された第１次調査により発見された遺跡である。平成 26 年４月には第２次調査が実施され、集石遺構が確認されている。今次報告の第３次調査は、平成 20 年に史跡小倉城跡が国指定となって以来、地元より継続的に頂いている大福寺の参道（町道 889 号線）の拡幅要望に伴うものである。そのため、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づき平成 29 年１月 16 日付とき教生第 237 号で「埋蔵文化財発掘の通知」を埼玉県教育委員会へ提出し、当該遺跡において第３次調査となる保存目的の範囲内容確認調査を平成 29 年１月 16 日に開始した。調査は平成 29 年５月 22 日の埋め戻しをもって完了し、平成 29 年５月 26 日に埋蔵物発見届を埼玉県小川警察署に提出し、平成 29 年５月 31 日に埋蔵文化財保管証を埼玉県教育委員会に提出した。そして埼玉県教育委員会より平成 29 年９月 19 日付け教生文第７－93 号で埋蔵物の文化財認定及び帰属についての通知があった。

調査組織

調査主体者　ときがわ町教育委員会生涯学習課

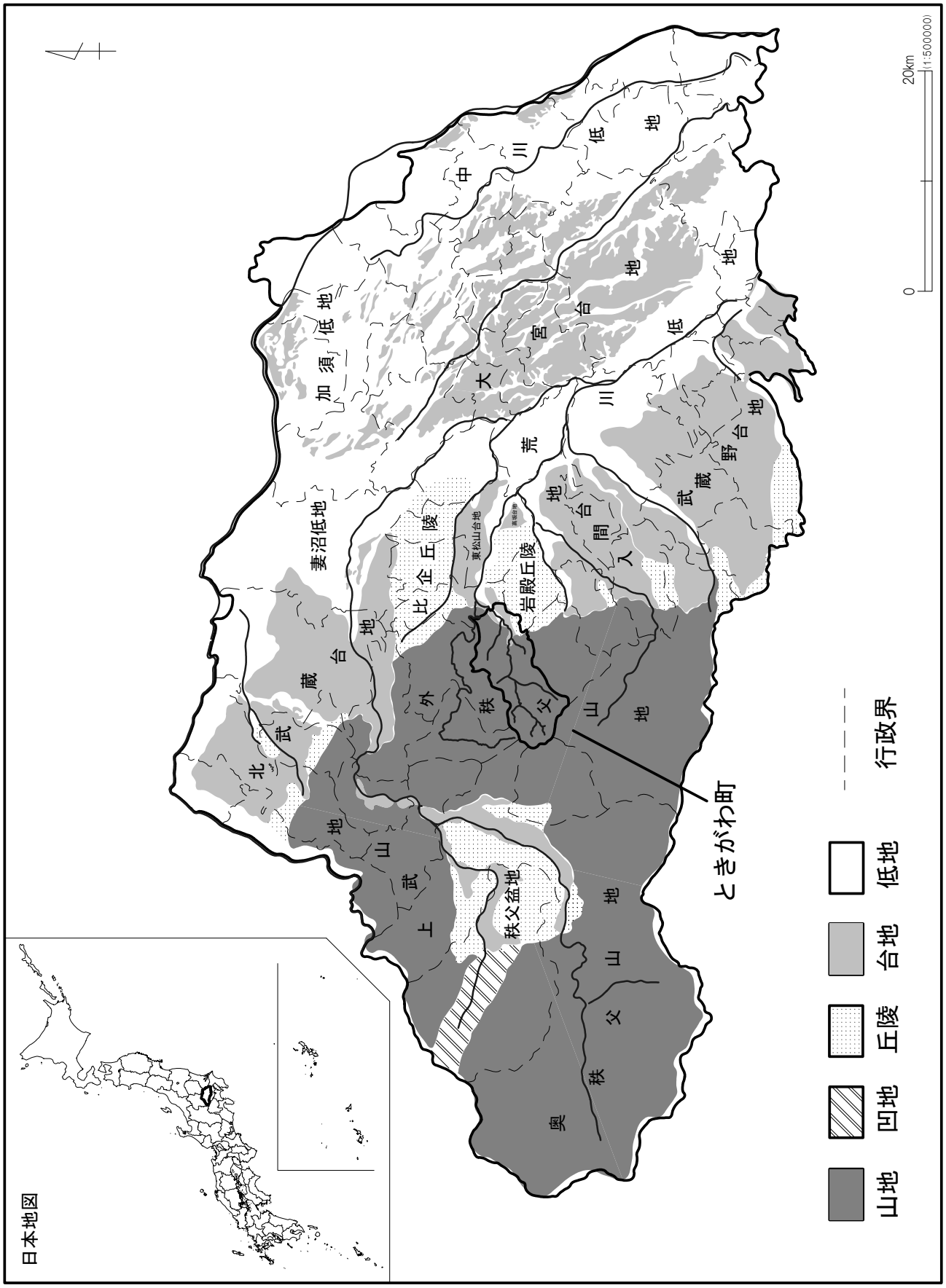
事　務　局	教　育　長	舩戸裕行（平成 28 年度）
	教　育　長	久米正美（平成 30 年度）
	生涯学習課長	石川安司
	生涯学習課主幹	正木彰
	生涯学習担当	森村恵美子
	生涯学習担当	杉山拓馬

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡周辺の地理的環境

ときがわ町は平成 18 年に旧玉川村と旧都幾川村が合併して誕生した。面積は 55.９㎢、人口は 11,000 人あまりである。埼玉県のほぼ中央に位置し、概略西に高く東に低い埼玉県の地勢をそのまま相似形に縮小したような地形である。東端の都幾川河床から西端の大野峠付近まで高低差 800ｍに及ぶ地形変化がみられる。町の大部分が外秩父山地に属しており、南東の一部に岩殿丘陵（南比企丘陵）の北西縁部がかかる。南北に走る JR 八高線をおおよその境に西に外秩父山地、東に丘陵と台地が形成されている。町の面積の七割が山林であり、最西端には標高 875.８ｍｍの堂平山をはじめ標高 700ｍ以上の山々が連なっている。この自然地形が分水嶺として町境となっている。町の中央を西から東へと荒川水系の都幾川が貫流し、北端から流れる支流の雀川と町内下流域で合流し、東の嵐山町へと流れる。また、町の北東端では、同じく都幾川の支流で東秩父村の堂平山を源とする槻川が小川町、嵐山町の３町境を蛇行して流れる。

本報告の大福寺境内遺跡はその蛇行して流れる槻川の右岸の段丘上で、仙元山から東に派生する支尾根の山裾に位置する。



第１図　埼玉県の地形図

２ときがわ町の遺跡

ときがわ町の遺跡は、そのほとんどが町の東側の沖積低地や低山などに集中的に分布する。それらの遺跡は過去の遺跡分布調査によって確認されたものである。ときがわ町の遺跡分布調査は大きく２時期に分けられる。まず第１期は、昭和 47 年を中心にその前後１年のなかで埼玉県教育委員会及び都幾川村教育委員会・玉川村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）によって遺跡分布調査が行われ、49 遺跡の分布が確認された。第２期は、昭和 61 年を中心におおよそその前後 1 年のなかで両村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）によって遺跡分布調査が行われており、遺跡は 44 箇所が確認され総数は 93 遺跡となった。その後、ときがわ町教育委員会による追加や変更増補があり、現在 110 遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

３　遺跡周辺の歴史的環境

旧石器時代

篠新田遺跡から黒曜石製のナイフ形石器（刃部側上半部分と思われる）の１点が出土しているのみである。嵐山町行司免遺跡においても後世の遺構覆土からの出土ではあるがナイフ形石器やポイント、不定形石器などの遺物が発見されていることから、今後この地域でこの時代の遺跡の発見が増加する可能性が高いと考えられる。

縄文時代

遺跡数が最も多く、東側の台地や低地に縄文時代早期から後晩期にかけて多くの遺跡が分布するようになる。

早期：都幾川右岸では日野原遺跡、都幾川左岸では地家遺跡から、撚糸文系、押型文系、沈線文系土器が出土している。

前期：日野原遺跡、地家遺跡、長久保遺跡などで関山式、黒浜式、諸磯式土器の出土事例があるほか、雀川左岸の丘陵上に位置する寒風遺跡などで諸磯ｃ式の土器が出土している。

中期：都幾川右岸の伊勢の台遺跡をはじめとする多数の遺跡で、加曽利 E 式期の遺構・遺物が検出されている。町内ではこの時期の遺跡が最も多い。

後期：狐塚遺跡から遺構外ではあるが堀之内式期の土器が出土している。ほかにも原遺跡から称名寺式期、日野原遺跡からは称名寺式、堀之内式、加曽利Ｂ式期の出土事例がある。

晩期：都幾川中流右岸の市の川遺跡のみである。昭和 50 年の採石工事で安行３式期の土器が出土している。平成 27 年度に実施した保存目的の範囲内容確認調査でも石製品とともに安行３式期の土器が出土している。

弥生時代

現在、町内で確認されているのは破岩遺跡のみである。愛宕山の東側を蛇行して流れる都幾川の舌状台地上に、中期後半に比定される弥生土器が２点確認されている。弥生時代後期に比企丘陵とその周辺において、岩鼻式土器と吉ヶ谷式土器という二つの土器文化が共存しながら展開するが、その前段階からこの地域では生活が営まれていたと考えられる。

古墳時代

古墳は一基も認められないが、中期の遺構が１例のみ確認されている。岩殿丘陵北西端に位置する衆生ヶ谷戸遺跡において、和泉式の壺と甕が発見されている。

奈良・平安時代

６世紀初頭から10世紀前半にかけて武蔵国の４大窯跡群の一つである南比企窯跡群が生産遺跡として岩殿丘陵（南比企丘陵）において展開する。ここで生産された須恵器や瓦がいわゆる南比企産として南関東に広く流通するが、町内では原遺跡、狐塚遺跡、伊勢の台遺跡などで須恵器が出土している。また、南比企窯跡群の将軍沢第６支群にあたる日野原遺跡１号窯跡と、同第７支群にあたる県指定史跡亀の原窯跡群が岩殿丘陵北西端に所在する。亀の原窯跡群は瓦陶兼業窯として９世紀代に操業し始め、南比企窯跡群のなかでも後期の窯跡群として知られる。ここでは立正大学考古学研究室及び玉川村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）により調査が行われており、Ａ地点に２基、Ｂ地点に７基の窖窯が確認されている。亀の原窯跡群が位置する丘陵斜面を登り切ると頂部には比較的平坦地が広がっている。ここには瓦陶兼業生産に携わっていた工人工房集落が確認された。この遺跡が篠新田遺跡であり、その立地は亀の原窯跡群と将軍沢第６支群の双方に関与する中間地点を占める。現在、竪穴建物跡15軒、掘立柱建物跡６棟が検出され、概ね竪穴建物跡２～３軒に１棟の掘立柱建物跡がセットとなる構成をとることが遺構分布から窺える。竪穴建物跡からは大量の須恵器、瓦を中心とする遺物が出土し、床面にはロクロピットが敷設されるものも検出された。また猿投産のK14号窯期の灰釉碗、K90号窯期の灰釉長頸瓶が出土している。

仏教関連遺跡としては、堂林遺跡が都幾川右岸で大福寺境内遺跡より南 1.2 ㎞に所在する。この遺跡では調査は行われていないが、戦前玉川尋常高等小学校（旧玉川村立玉川小学校）で教頭として教鞭をとられていた郷土史家小鷹健吾氏も紹介しており、古くから古代瓦の散布地として知られていた。かつて玉川小学校の郷土資料として保管されていた資料には、この遺跡採集の古代瓦があり、その中には武蔵国分寺所用瓦のうち、平城宮系とされる均整唐草文軒平瓦と類似する同文資料が存在する。この資料は８世紀後半～９世紀前葉に否定される。愛宕山南面の山腹には旧医光寺跡が所在する。埼玉県立歴史資料館（現埼玉県立嵐山史跡の博物館）とときがわ町教育委員会により調査が実施され、所在する５段の平場のうち最上段の平場で礎石建物１棟と敷石遺構などが検出された。年代は９世紀

中葉から 10 世紀前葉で、出土した須恵器には南比企産と末野産が混在する。また僅かに出土する瓦小破片からは、南比企窯跡群からの供給を伺わせ、軒丸瓦が亀の原窯跡群に見られるものと同様の素弁系で、丸瓦もナデのある薄造りのもので南比企窯跡群北側支群からの供給であると考えられる（石川 2015)。

中世（鎌倉・室町時代）

町の中央北側にそびえる標高 463 メートルの都幾山の南面中腹に広がる旧慈光寺跡、町の北東端には戦国時代の山城として知られる小倉城跡が所在する。

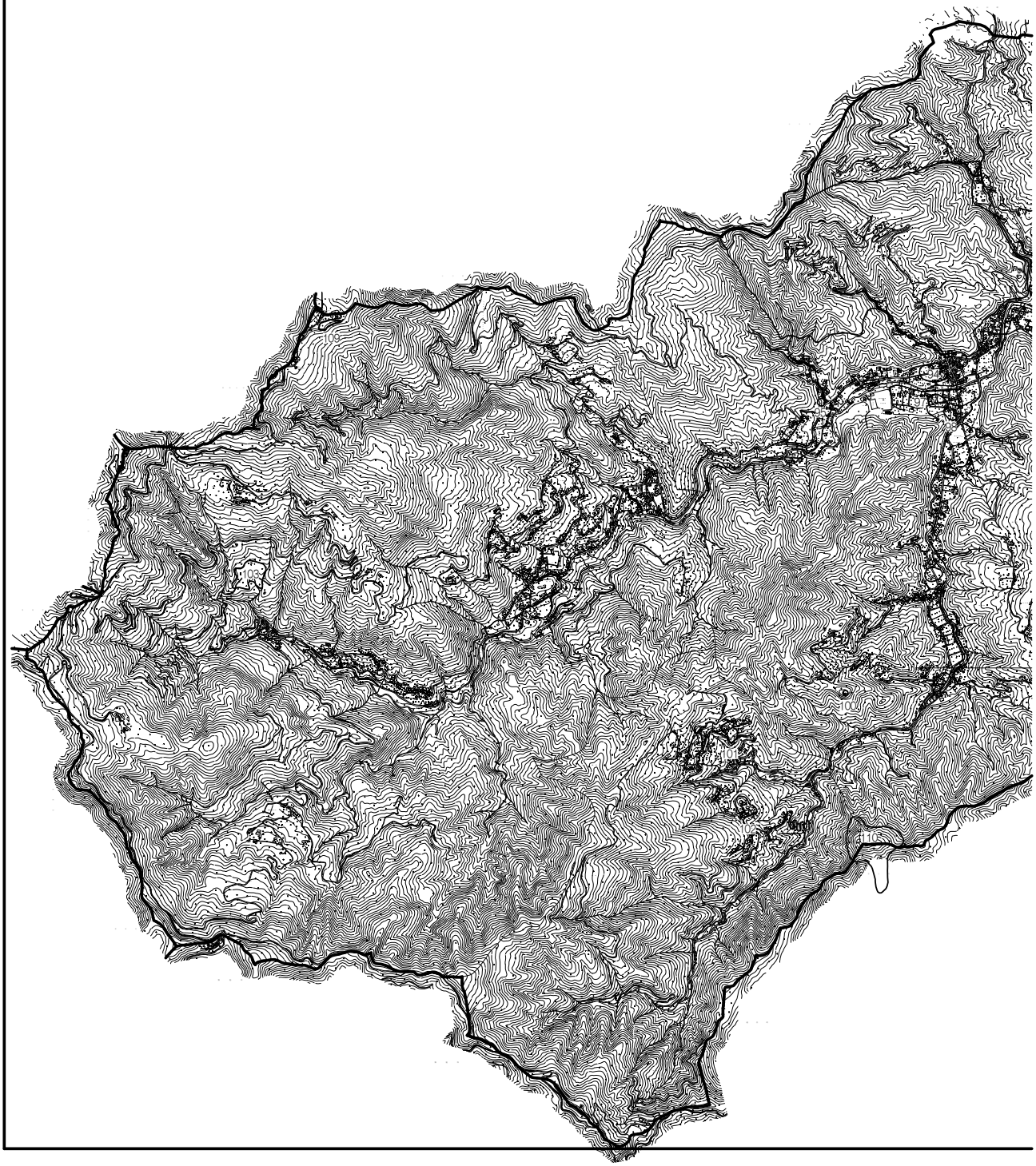
旧慈光寺跡は埋蔵文化財包蔵地として約 150ｈａの面積が登録されている。遺跡内には現在計 126 箇所の僧坊跡が確認されているほか、それら僧坊跡を結ぶ古道や七井として伝わる井戸跡などが所在する。遺跡のほぼ中心部分に位置する慈光寺は現在も法灯を伝える埼玉県内で最古といわれる天台宗の寺院である。寺歴をひもとくと、興福寺の僧慈訓が千手観音像を安置したことにはじまり、ついで、白鳳期には役行者が修験の道場とされている。そして奈良時代に、鑑真和上を師とする道忠禅師によって寺は開山されたと言われている。平安時代には、比叡山延暦寺の別院として「天台別院一乗法華院」とも称された。以降、鎌倉時代には七十五もの僧坊を有する一大山岳寺院として隆盛を誇る。慈光寺と将軍頼朝とのつながりを示す唯一の資料として、鎌倉幕府によって編纂された『吾妻鏡』がある。特に建久３年の記録では、後白河法皇の仏事に伴う百僧供養に際し、頼朝ゆかりの社寺から多数の僧が派遣される中で慈光寺では 10 人もの僧を派遣おり、この寺が重視されていたことがわかる。

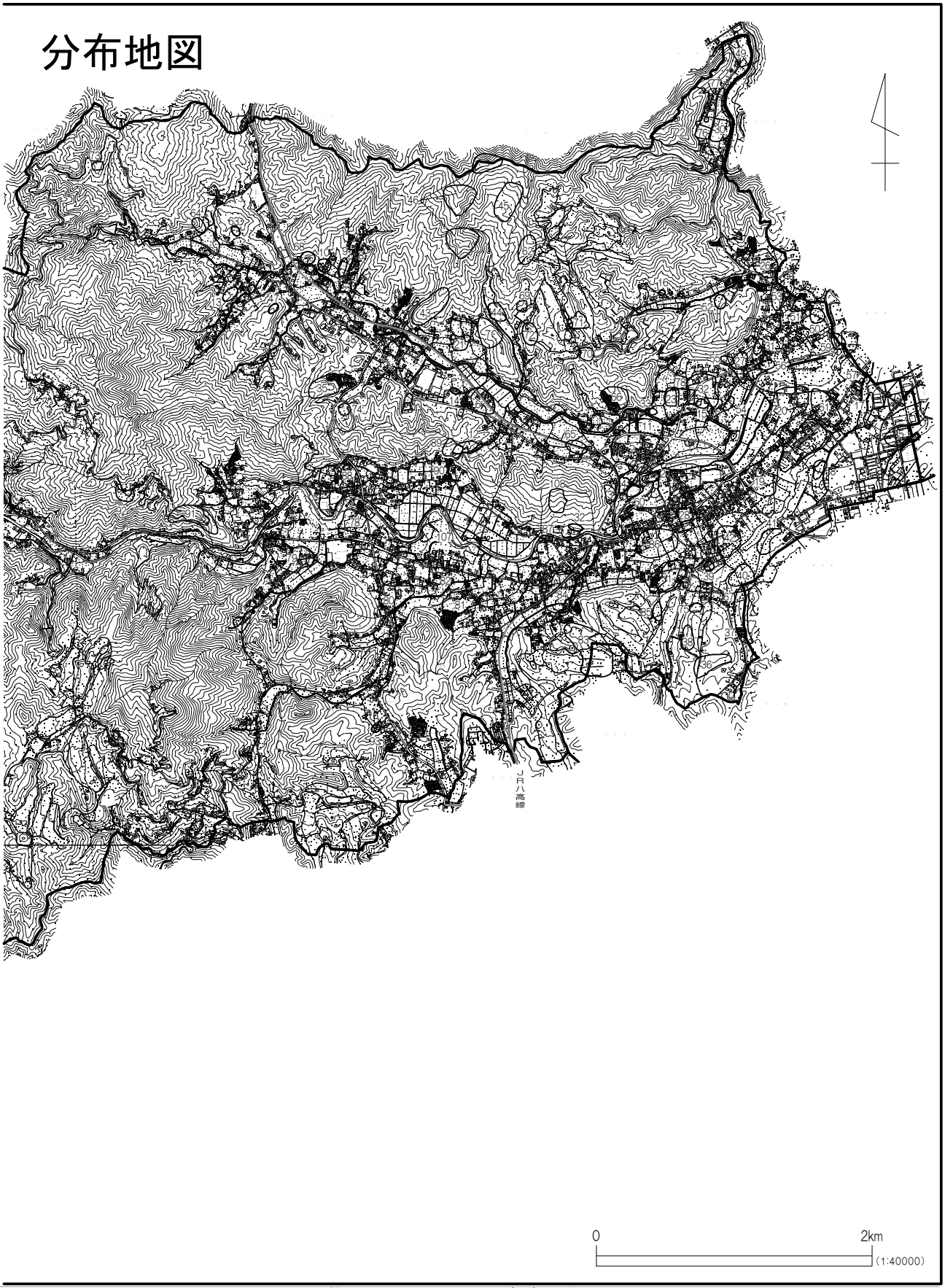
発掘調査歴としては過去に数地点において発掘調査が実施されている。平成４年度に№78 地点、平成７年度に№79 地点、平成９年度に№76 地点、平成 20 年度に伝和田の井地点、平成 22 年度に№41 地点、平成 24 年度に№63 地点、№126 地点がそれぞれ調査されている。

小倉城跡は、舌状に突出した丘陵の尾根を占地し、その裾を取り囲むように蛇行する槻川が流れる地形環境にある。更に川を挟んだ向かい側には大平山などの山があって自然地形を、堀や障壁として取込み、天然の要害として利用している。今のところ同時代の文献史料は確認されておらず城主は不明であるが、江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」では小田原北条氏の重臣である遠山氏、「武蔵志」では遠山氏あるいは上田氏とも伝えている。構造的には、地形を巧みに利用した５つの郭を造成しており、郭に伴って土塁や堀、切岸、虎口といった防御施設が設けられている。そして、随所に在地の結晶片岩を利用した石積み遺構が見られる。

発掘調査は郭１を平成 15 年から平成 17 年にかけて行われている。南にめぐる土塁内側で石積みが確認されたほか、中央やや南側で岩盤をくり抜いた柱穴が多く確認された。４軒分の建物跡が想定されている。柱穴は直径１ｍ前後の大型のもの、50ｃｍ前後の中型のもの、10～20ｃｍの小型のものがあり、概して大振りのものが多い。中国明代の染付の碗皿、白磁の碗皿、国内の常滑焼の甕、瀬戸焼の碗皿、擂鉢、徳利、カワラケ等の 16 世紀前半から第３四半期に比定される遺物が出土している。

ときがわ町遺跡





第２図　ときがわ町遺跡分布地図

第１表　ときがわ町遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地（大字以下）	時代
1	衆生ヶ谷戸遺跡	大字玉川字衆生ヶ谷戸	縄文中期、古墳、平安
2	後久保遺跡	大字玉川字後久保	縄文中期
3	№3遺跡	大字玉川字根際	平安
4	玉川小学校裏遺跡	大字玉川字根際	縄文
5	根際遺跡	大字玉川字根際	縄文中期
6	中野原遺跡	大字五明字中野原	縄文前期・中期、古墳、奈良、平安
7	岩鼻遺跡	大字五明字田中	縄文中期
8	栗ヶ谷戸№1遺跡	大字五明字栗ヶ谷戸	縄文中期、古墳、奈良、平安、南北朝、室町、戦国
9	穴田遺跡	大字五明字栗ヶ谷戸	縄文中期、古墳
10	栗ヶ谷戸№3遺跡	大字五明字栗ヶ谷戸	縄文中期、古墳、奈良、平安、南北朝、室町、戦国
11	玉川陣屋跡	大字玉川字裏宿	縄文、平安～江戸
12	中野遺跡	大字五明字中野	縄文前期・中期、平安
13	高谷遺跡	大字日影字高谷	縄文前期
14	小山遺跡	大字五明字中野原	縄文早期・中期
15	地家遺跡	大字玉川字地家	縄文中期、鎌倉、南北朝、室町
16	明王院裏遺跡	大字田黒字菩提	縄文中期
17	亀の原窯跡	大字玉川字亀ノ原	平安
18	篩新田遺跡	大字玉川字篩新田	平安
19	伊勢の台遺跡	大字玉川字伊勢の台	縄文中期、平安
20	原遺跡	大字玉川字原	縄文中期、平安
21	衆生ヶ谷戸遺跡	大字玉川字衆生ヶ谷戸	縄文中期、古墳、平安
22	小倉城跡（国指定史跡）	大字田黒字江戸田、城山	戦国
23	地家前遺跡	大字玉川字地家前	縄文、鎌倉、南北朝、室町、戦国
24	道元平ウラジロ群落		天然記念物
25	日野原遺跡	大字玉川字日野原	縄文前期、奈良、平安
26	前田遺跡	大字田黒字前田	平安
27	坪ノ内遺跡	大字玉川字坪ノ内	縄文、平安、室町、戦国
28	唐沢遺跡	大字玉川字唐沢	縄文中期
29	狐塚遺跡	大字玉川字狐塚	縄文中期、平安
30	小倉遺跡	大字田黒字小倉	縄文前期、平安、室町、戦国
31	和田遺跡	大字玉川字和田	平安
32	地家遺跡№2	大字玉川字地家	縄文中期
33	春日神社前遺跡	大字玉川字平	縄文中期、鎌倉、南北朝、室町
34	比良遺跡	大字五明字比良	縄文早期
35	二本松遺跡	大字玉川字二本松	奈良、平安
36	仲井塚群	大字玉川字向山、二本松	江戸（不詳）
37	向山遺跡	大字玉川字向山	縄文
38	薬師堂遺跡	大字玉川字衆生ヶ谷戸	奈良、平安
39	仲井遺跡	大字玉川字向原	縄文中期
40	向原遺跡	大字玉川字向原	平安、鎌倉
41	一ト市遺跡	大字玉川字一ト市	縄文中期、奈良、平安
42	西山遺跡	大字五明字西山	縄文早期
43	槍沢遺跡	大字玉川字槍沢高田	縄文早期・前期
44	大平遺跡	大字五明字大平	縄文
45	物見山遺跡	大字五明字物見山	戦国
46	谷遺跡	大字日影字谷	縄文
47	五明畑遺跡	大字五明字五明畑	鎌倉、南北朝、室町、戦国、江戸
48	山王山遺跡	大字田黒字山王山	縄文、平安、戦国
49	狢ヶ谷戸遺跡№1遺跡	大字田黒字狢ヶ谷戸	平安
50	狢ヶ谷戸遺跡№2遺跡	大字田黒字狢ヶ谷戸	奈良、平安
51	陣場山裏遺跡	大字田黒字陣場山	縄文前期
52	堂林遺跡	大字田黒字菩提	縄文中期、奈良、平安
53	荒田遺跡	大字玉川字荒田	奈良、平安
54	坪ノ内№2遺跡	大字玉川字坪ノ内	縄文
55	和田№2遺跡	大字玉川字和田	縄文、奈良、平安

番号	遺跡名	所在地(大字以下)	時代
56	亀ノ原No.2遺跡	大字玉川字亀ノ原	縄文中期
57	五反田遺跡	大字玉川字五反田	奈良、平安
58	和田前遺跡	大字玉川字和田前	縄文中期
59	破岩遺跡	大字玉川字破岩	弥生中期、奈良、平安、鎌倉、南北朝
60	坂上遺跡	大字玉川字坂上	縄文中期
61	小市遺跡	大字玉川字小市	縄文前期
62	田向遺跡	大字日影字田向	縄文、奈良、平安
63	小北遺跡	大字日影字小北	鎌倉、南北朝、室町、戦国
64	平松下中道遺跡	大字玉川字平松下中道	縄文中期
65	北山遺跡	大字玉川字北山	縄文前期
66	向山遺跡No.2	大字玉川字向山	縄文中期、平安
67	栗ヶ谷戸No.4遺跡	大字五明字栗ヶ谷戸	鎌倉、南北朝、室町
68	槍沢東遺跡	大字玉川字槍沢	縄文前期
69	小松遺跡	大字玉川字小松	縄文早期・前期
70	笹山遺跡	大字玉川字笹山	縄文早期・前期
71	寒風遺跡	大字玉川字寒風	縄文
72	長久保遺跡	大字日影字長久保	縄文早期・前期、平安
73	八盃沢遺跡	大字五明字八盃沢	縄文早期
74	向山北遺跡	大字玉川字向山	縄文
75	大福寺境内遺跡	大字田黒字小倉	縄文、平安
76	大福寺東遺跡	大字田黒字小倉	縄文前期・中期、鎌倉、南北朝、室町、戦国
77	堀ノ内館跡	大字玉川字地家前	縄文、戦国
78	螺向遺跡	大字田中字螺向	縄文中期
79	八幡遺跡	大字桃木字神戸、大門	縄文早期～後期、室町
80	美根遺跡	大字関堀字美根	縄文中期
81	愛宕山遺跡	大字関堀字畑山	縄文中期、平安
82	愛宕山下遺跡	大字関堀字中ソリ	縄文、平安
83	江光山遺跡	大字番匠字江光	縄文早期～後期
84	台遺跡	大字番匠字台	縄文前期・中期、平安
85	門林遺跡	大字番匠字門林	縄文前期
86	原遺跡	大字番匠字原	縄文中期
87	川久保遺跡	大字番匠字川久保	縄文中期
88	沢口遺跡	大字本郷字沢口	縄文中期
89	白粉山遺跡	大字本郷字殿ヶ谷戸	縄文中期
90	白粉山下遺跡	大字本郷字殿ヶ谷戸	縄文中期、平安
91	於根遺跡	大字別所字於根	縄文後期
92	女鹿岩遺跡	大字西平字女鹿岩	縄文中期
93	中瀬戸遺跡	大字瀬戸元下字江地谷戸	縄文前期
94	平宿遺跡	大字西平字宿	縄文中期・後期
95	曲玉遺跡	大字西平字曲玉谷	縄文
96	旧慈光寺跡 (県選定重要遺跡)	大字西平字竹ノ平、石打場、後野、都幾山、西谷、鐘嶽、乳児岩、慈光坂、細入	平安～江戸
97	中尾原遺跡	大字西平字中尾原	縄文中期・後期
98	八幡平遺跡	大字西平字中尾原	縄文中期・後期
99	夏内遺跡	大字西平字夏内	縄文中期
100	多武峰瓦塔遺跡	大字西平字多武峰	平安～室町
101	日向根遺跡	大字椚平字日向根	縄文後期
102	堂場遺跡	大字椚平字堂場	縄文早期・後期
103	橋倉城	大字大野字橋倉	戦国
104	タラヨウジュ		天然記念物
105	カヤ		天然記念物
106	三境ヒカリゴケ自生地		天然記念物
107	市の川遺跡	大字田中字市川	縄文後期・晩期
108	旧医光寺跡	大字番匠字峰山	縄文前期、平安
109	堂平山遺跡	大字大野字七重	平安、南北朝、室町、戦国
110	大築城跡	大字西平字大築、大字椚平字大津久	戦国

Ⅲ　遺跡の概要

大福寺境内遺跡は、埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉 608 外に所在し、国指定史跡小倉城跡の東山麓に位置する。当該地は、ときがわ町、嵐山町、小川町の境界付近にあって、地形的にも外秩父山地と関東平野の境界に位置する。遺跡周辺は、槻川の蛇行により形成された、谷、山地、段丘面が隘路により閉ざされた空間として存在し、自然地形を活かした天険の要害に立地する。この遺跡背後の小倉城跡は、標高 137ｍをピークとする郭１とやや低い郭２を頂部に配置し、以下梯郭式に郭を形成する。当遺跡の位置する大福寺は研究者により山麓の根古屋とみられている注目の場所で、その前面には大きく食い違い状に溝掘の跡らしき南北に細長い区画として水田跡が現在も確認できる。現況では大福寺は山裾を切土して造成した平場地形にあり、以下東へ雛壇状に畑地が造成されながら比高を下げて段丘面、槻川河床へと至っている。

大福寺境内遺跡は、旧玉川村立玉川小学校に保管されていた、大福寺境内で採集された中世瓦が注目される。いわゆる比企型剣頭文軒平瓦で武蔵府中の大國魂神社（旧武蔵総社六所宮）出土資料と同范であり 13 世紀末～14 世紀初頭に比定されている。都幾川流域と中世国府域との関連を窺わせる極めて貴重な事例である。境内地周辺の中世石造物は板碑や五輪塔、宝篋印塔の存在が確認できる。板碑は、亡失も含め 15 基が確認されており、紀年銘の解るものは６基、年代幅は弘安３年～応永 21 年（1280～1414）で戦国期のものは確認されていない。五輪塔、宝篋印塔は、境内地及びその北に隣接する墓地に残欠が散在する。江戸時代には関係する文書が残らないが『新編武蔵風土記稿』では同寺について①慶安２年（1649）に熊野権現社領として朱印地５石６斗が安堵されていること、②下青鳥村浄光寺の末寺で開山は賢仙、寂年を伝えずとされている。①については、背後に所在する小倉城跡の東面の最も下に位置する腰郭群あたりを「くまのさま」と地元で呼んでおり、石組の祠が現存している。先の比企型中世瓦が神社系の瓦である点は符合する点であり注目する必要がある。②については同書編さん段階ではすでに記録が失われていたのであろうか。あるいは、周辺に残る遺物等を勘案すると、逆に開山が中世段階まで遡るためとも考えられる。現地に残された、住職墓の紀年を確認すると、明和５年（1768）、寛政５年（1793）、天保 14 年（1843）、明治２年（1869）で 18 世紀後半～19 世紀後半にまとまり、風土記稿編さん段階で住職が止住していたことが確認できる。ちなみに僧侶名には「阿闍梨」「法印」がつき天台密教的な系譜を伝えたものであろうか。（ときがわ町埋蔵文化財調査報告第６集『町内遺跡Ⅴ』より転載）

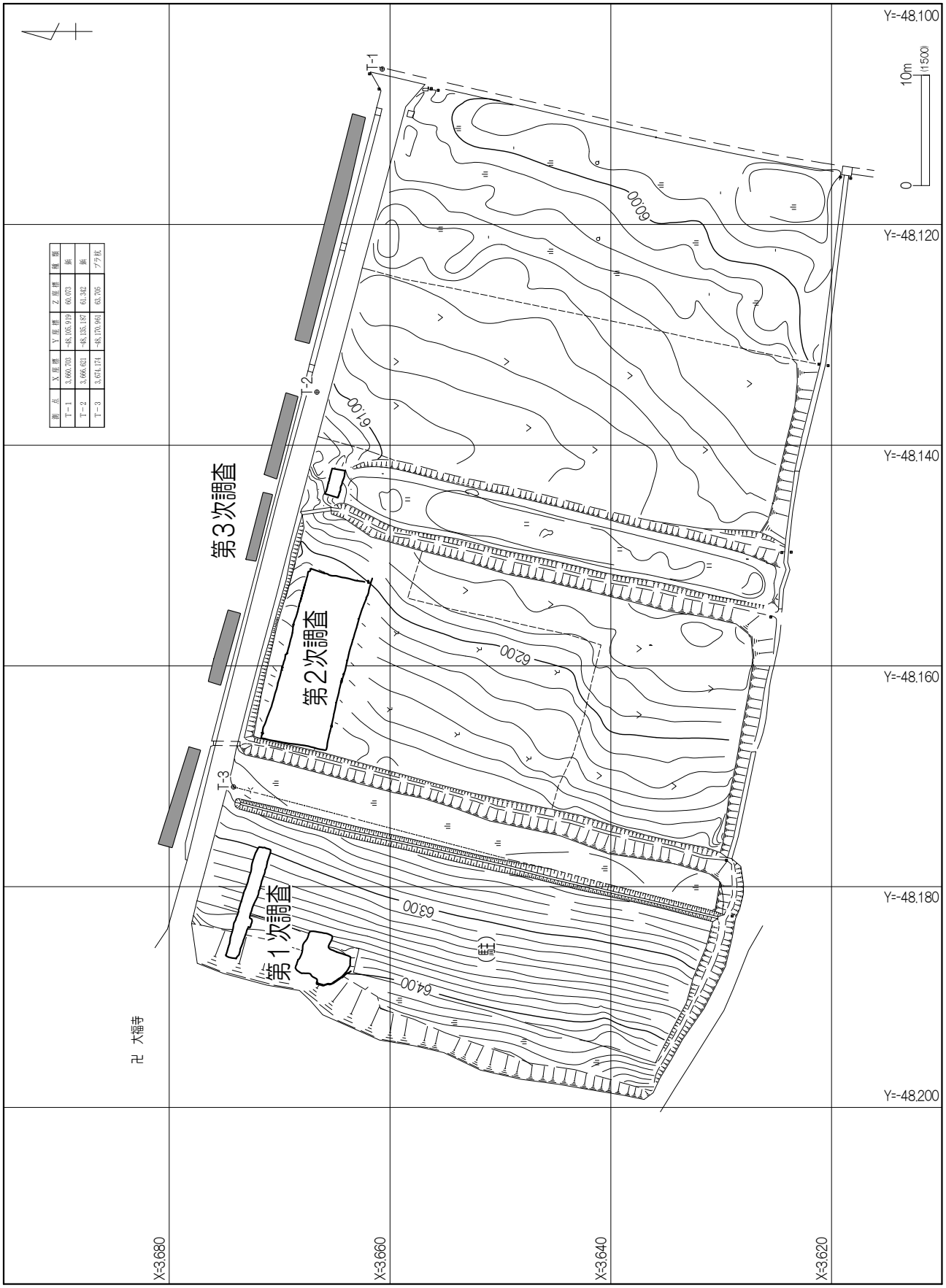
既往の調査としては、第１次調査が平成 22 年４月に実施された。国指定史跡小倉城跡の臨時駐車場設置の準備に伴う保存目的の範囲内容確認調査であり、これが当遺跡の発見の契機となった。遺構としては上層に近世段階の石積み遺構、石敷き遺構、下層に中世段階の遺構面の存在が確認された。石積み遺構はその検出状況から寺の正面法面の化粧遺構であると推測される。遺物としては、内耳鍋などの中世在地土器や常滑甕、瀬戸美濃擂鉢、中世瓦といった中世遺物が出土しているほか、近世陶磁

器の破片資料が出土している。

第２次調査は、平成 26 年４月に国指定史跡小倉城跡の駐車場・トイレ候補地を探るための保存目的の範囲内用確認調査として実施された。遺構としては、古代の竪穴建物跡がプランは不明ながら埋没している可能性が高いことが指摘されており、また、中世以降の集石遺構が確認されている。遺物は、10 世紀初頭前後の末野産の須恵器、須恵器系土師質土器が町内で初めて確認されているほか、風字硯や猿投産のＫ−90 窯期の灰釉陶器長頸瓶、段皿片が出土しやや特殊な出土傾向にある。また、中世の遺物としてはカワラケや中世在地土器、瀬戸美濃産の大窯期の匣鉢、大窯３期の天目茶碗などが出土している。

第３次調査は本報告による。

第３図　遺跡周辺の地形

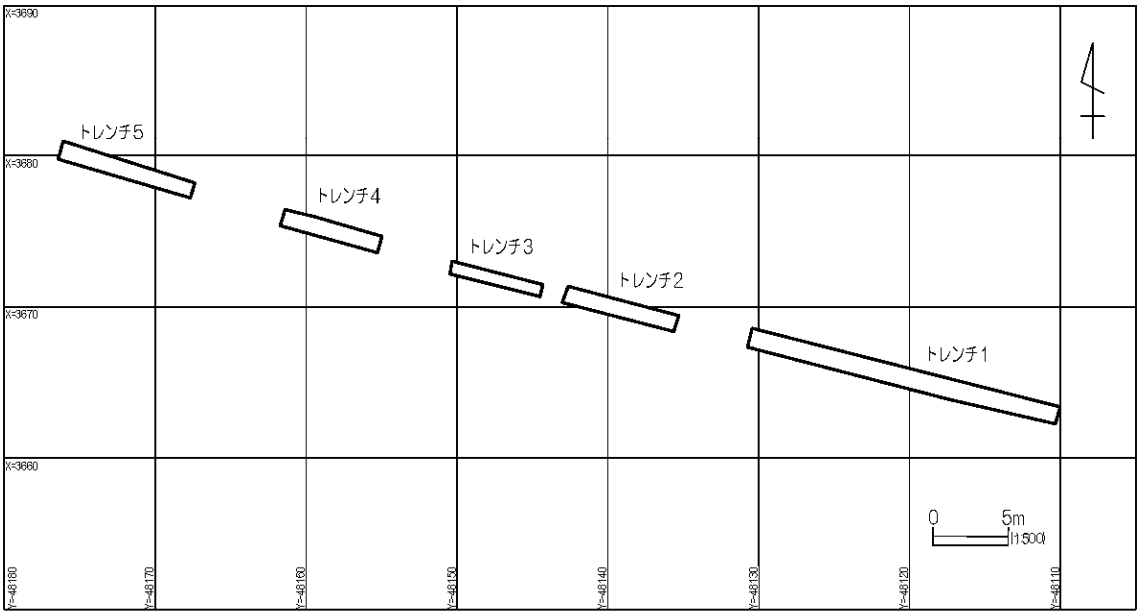


第４図　既往の調査区位置図

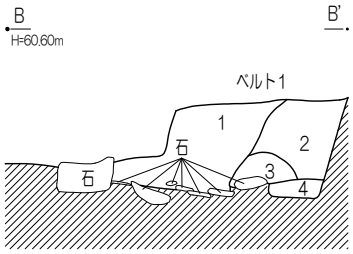
Ⅳ　調査の方法と成果

１　調査の概要

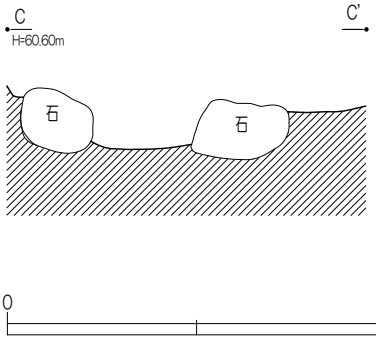
調査範囲は大福寺の東側下段に東西方向に延びる参道において、その北側幅２ｍ以内を対象とした。その調査区のなかで、５本のトレンチを設定した。調査総面積は 50.6 ㎡である。トレンチは東から第１号トレンチ、第２号トレンチ、第３号トレンチ、第４号トレンチ、第５号トレンチとした。トレンチのおおよその長さはそれぞれ 21.0m、7.5m、6.2m、6.6m、9.1mで、幅はいずれも約 1.0mである。調査方法としては、重機（小型バックホウ）で表土除去作業を実施し、表土除去後は人力で掘削し遺構確認を行った。遺構測量はマルチコプターによる空中写真測量を実施した。対空標識の観測はトータルステーションを使用した。使用した基準点は第２次調査（平成 26 年）時に設置したものである。遺跡の層序は現地表面から遺構確認面までが 60～80cm であった。表土約 10cm が耕作土であり、それより下が自然堆積土で極めて硬い土であった。

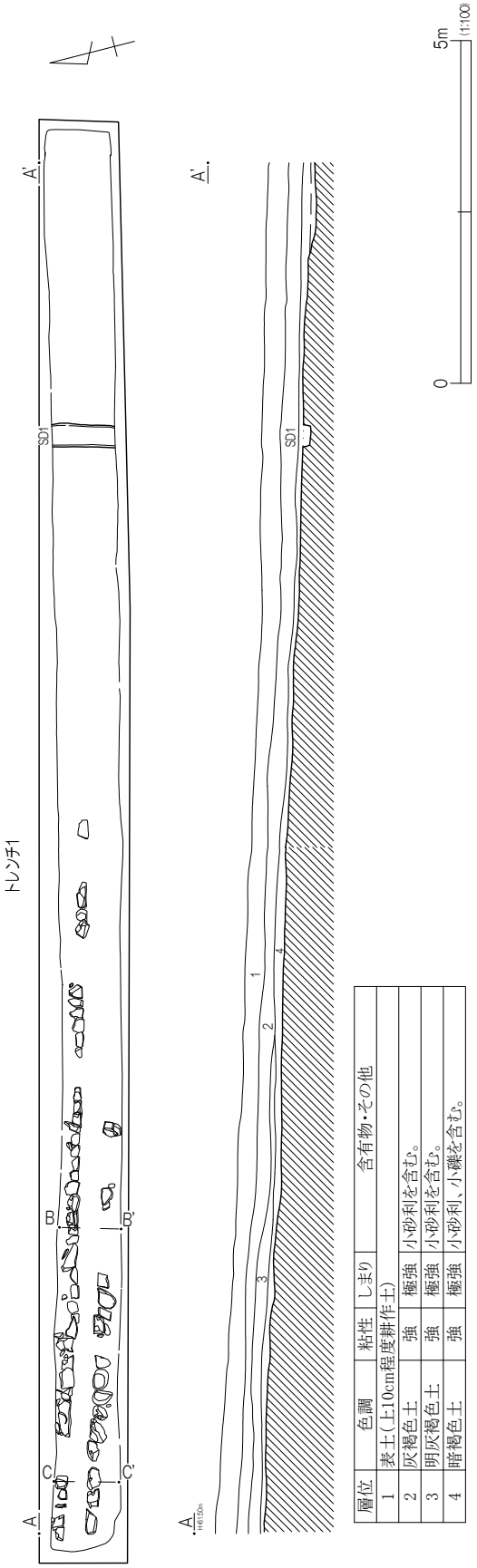


第５図　調査区全体図



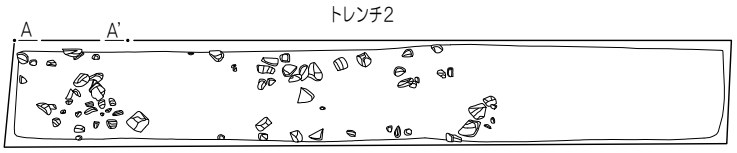
層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	濃暗褐色土	強	極強	礫(φ3cm大)を多く含む。
2	暗褐色土	強	極強	小礫(φ1cm以下)を多く含む。
3	暗褐色土	強	極強	小礫(φ1～2cm)を少し含む。
4	黒褐色土	強	極強	礫(φ1cm)を多く含む。

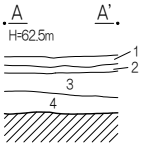




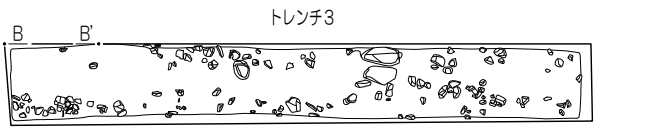
層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	表土(上10cm程度耕作土)			
2	灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
3	明灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
4	暗褐色土	強	極強	小砂利、小礫を含む。

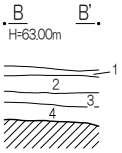
第６図　第１号トレンチ平面図／断面図



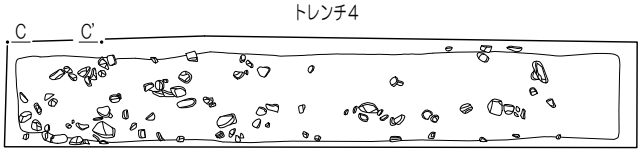


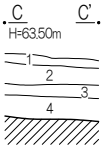
層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	耕作土			
2	表土			
3	灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
4	暗褐色土	強	極強	小砂利、小礫を含む。



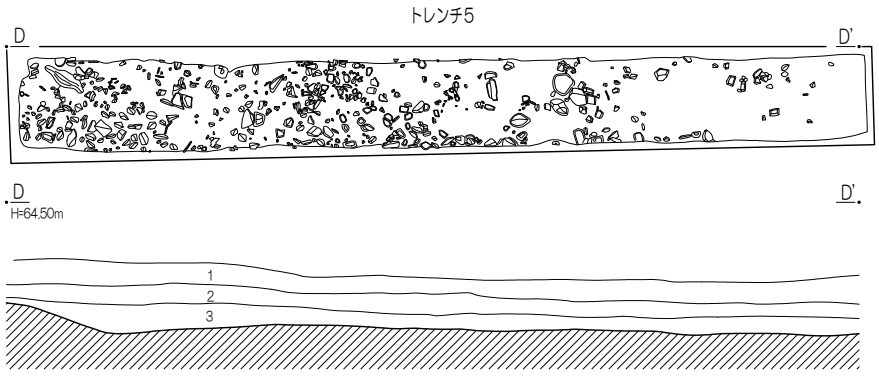


層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	耕作土			
2	表土			
3	灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
4	暗褐色土	強	極強	小砂利、小礫を含む。

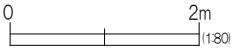




層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	耕作土			
2	表土			
3	灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
4	暗褐色土	強	極強	小砂利、小礫を含む。



層位	色調	粘性	しまり	含有物・その他
1	表土			
2	灰褐色土	強	極強	小砂利を含む。
3	暗褐色土	強	極強	小砂利、小礫を含む。



第７図　第２～５号トレンチ平面図／断面図

２　遺構と遺物

本調査区で検出された遺構は、側溝１条、溝跡１条、集石１箇所である。遺構の時期については、側溝は共伴する遺物から中世以降と考えられる。溝跡については、直接の共伴する遺物はなかったが周辺の出土遺物から中世段階まで遡ると考えられる。集石については古代、中・近世のいずれかと考えられる。

（１）側溝

第１号トレンチ西側で東西に延びる側溝が検出された。側溝は２条の石列で構築されている。石列は所々に抜けがあり、トレンチ西壁から 10.7ｍの地点の石を最後にそれより東は途絶えてしまっているため、規模は検出長で北側の石列が［10.5］ｍ、南側の石列が［9.5］ｍを測る。南北の石列の間隔はおおむね 0.3ｍで一定している。石列の走行方向はＮ73°Ｗである。使用されている石材はチャート、凝灰岩、結晶片岩を主とする。石材の大きさは大小の差はあるもののおおよそどれも頭大である。形についてはどれも不揃いであるが、石の長軸方向にある程度の面を有する箇所を側面にして一直線上に配置している。石列の下部構造については特筆すべき点はなく、石をそのまま単発的に設置していると考えられる。場所によっては、厚さのない平らな片岩は２段に重ねて使用しているなど、石材の規模に応じて高さを揃えている箇所が見受けられる。溝の覆土には小砂利や小礫を含み、排水の過程で流れる土砂が流れ込んでいる。溝底面に敷石は認められなかった。

遺物は側溝内外で中世在地土器などが出土しており、時期は中世と考えられる。

（２）溝跡

第１号トレンチの東側より１条の溝跡を検出した。規模は幅 0.32ｍで、深さ 0.1ｍ、走行方向はＳ15°Ｗである。調査区外に延びており、全容は確認できなかった。遺物は出土していないが、周辺の出土遺物から遺構の時期は中世以降と考えられる。

（３）集石

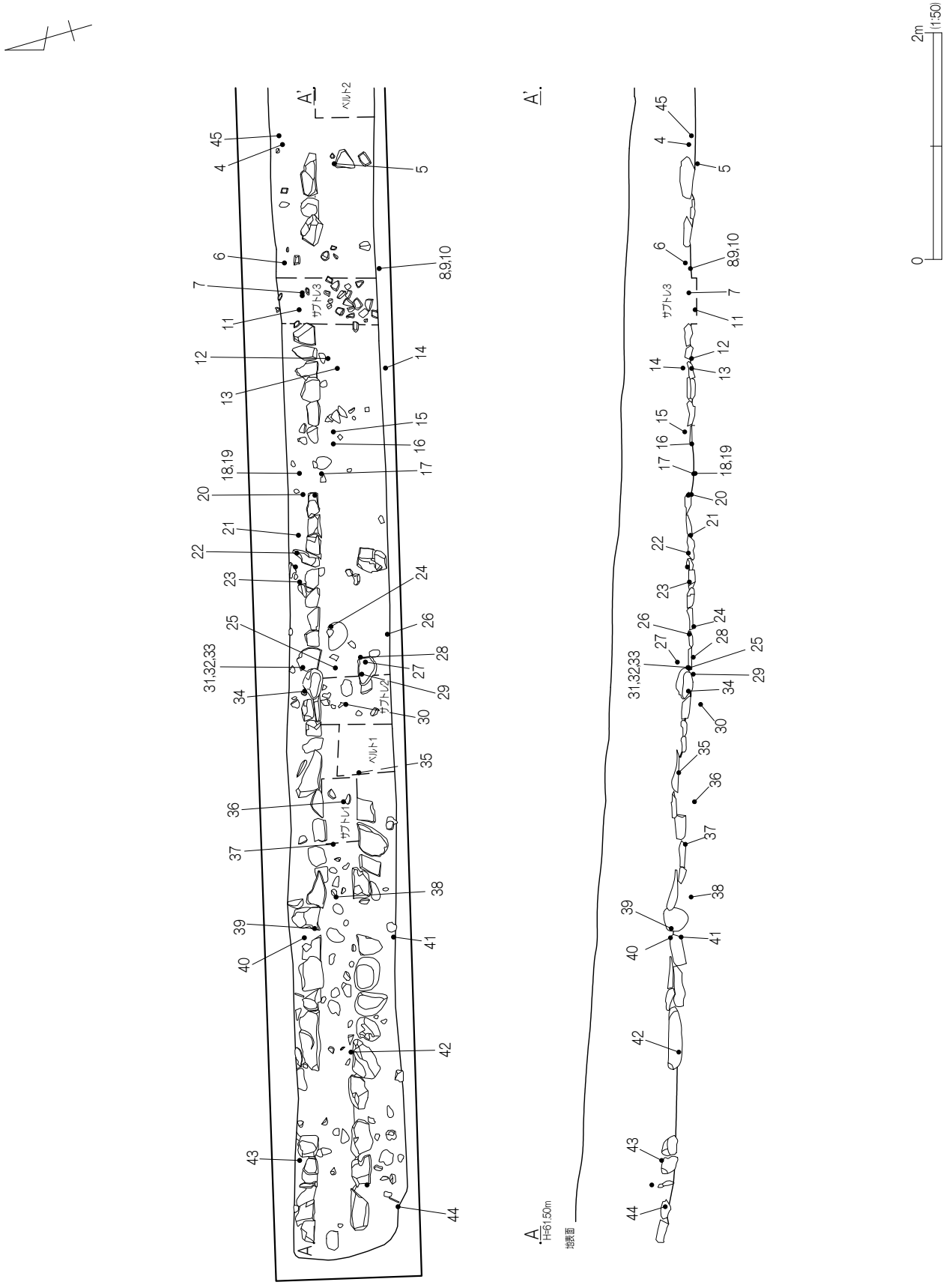
第５号トレンチ東側より検出した。大福寺の法面直下に位置しており、単純な山からの石の流れ込みである可能性もある。遺物は古代の須恵器や土師器、中近世の陶磁器等が出土しており、遺構の時期についてもこの範疇に当てはまるものと考えられる。

（４）調査区出土遺物

調査区内で出土したもののなかで、図版に耐えうる遺物を選択的にいくつか掲載した。多数の時期の遺物が出土しているが、調査面積が狭小であったこともあり、多くが小片で、摩耗が激しい。

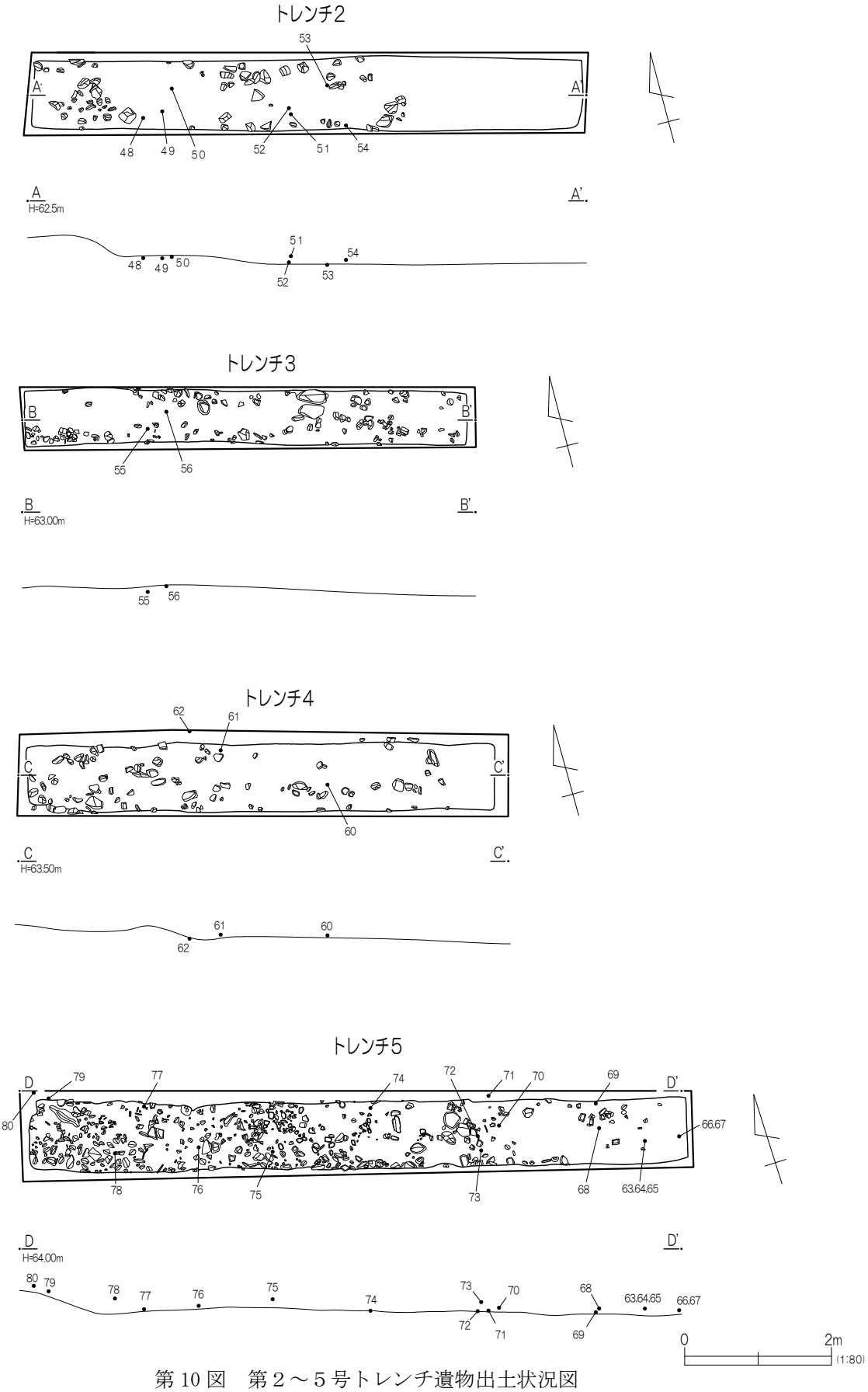
第 11 図１～３は須恵器である。１は甕の口縁部片で口径は（21.0）㎝、末野産である。色調は灰黒

色を呈し、胎土に片岩粒子が認められる。２は坏の底部片で底径は（6.4）cm、末野産である。色調は薄灰黒色を呈し、胎土に片岩粒子が認められる。３は甕の胴部片で南比企産である。胎土に白色針状物質が認められる。４～６は土師器である。４は坏の口縁部片で口径は（7.0）cm、ロクロ整形である。５は坏の口縁部片で口径は（11.0）cm、ロクロ整形である。６は坏の底部片で底径は（7.2）cm、ロクロ整形である。茶褐色を呈し、胎土に砂粒が認められる。７～12 はカワラケである。７は口縁部片で口径は（11.6）cm、ロクロ整形である。８は口縁部片で口径は（12.0）cm、ロクロ整形である。橙色を呈し、胎土は緻密であるがわずかに砂粒が認められる。９は底部片で底径は（7.4）cm、ロクロ整形である。色調は薄橙色を呈する。10 は底部片で底径は（8.4）cm である。橙色の色調で、胎土にわずかに砂粒が認められる。11 は口縁部片で口径は（13.4）cm である。12 は底部片で底径は（8.0）cm、ロクロ整形である。薄橙色の色調で、胎土は緻密である。13～17 は中世の陶磁器である。13 は甕の胴部片で瀬戸・美濃産である。赤みがかっ色で酸化鉄の色調を呈する。14 はすり鉢の胴部片で瀬戸・美濃産である。同じく赤みがかっ色で酸化鉄の色調を呈する。内面に縦方向に振り落とした櫛目が認められる。15 は甕の胴部片で常滑産である。外面にヘラ状工具によるナデが認められる。16 は灰釉陶器の口縁部片で口径は（13.0）cm である。17 は天目茶碗の底部片で高台の外形は 4.8cm、内面に鉄釉が認められる。18 は石鉢で石材は砂岩、口径は（27.8）cm、底径は（19.4）cm、重さは［2.87］kg を測る。内縁にススの付着が認められる。底部に高台が作り出されており、全体的にきれいに整形されている。胴部外面には削平による面を数か所有する。

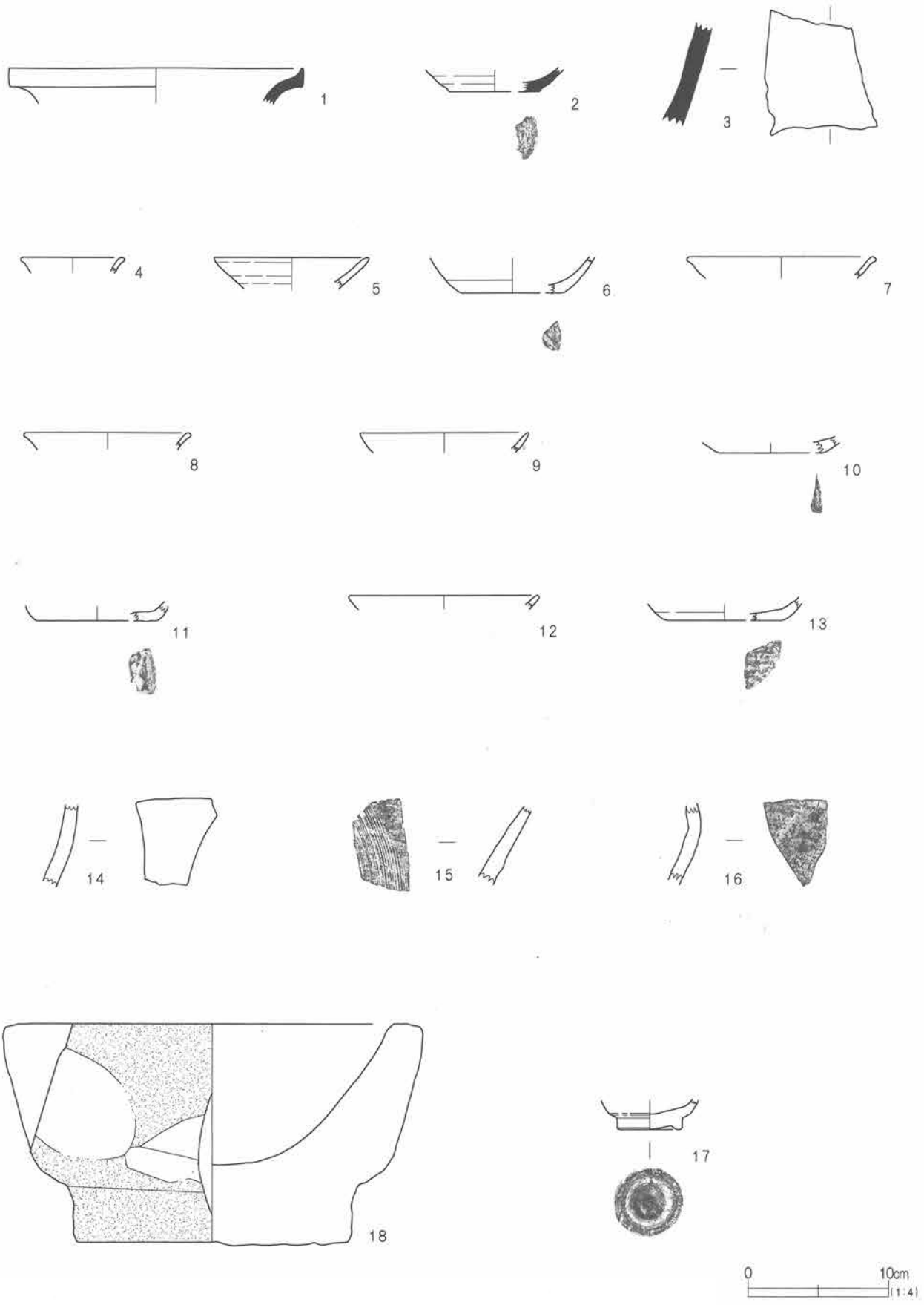


第８図　第１号トレンチ遺物出土状況図（１）

第９図　第１号トレンチ遺物出土状況図（２）



第 10 図　第２～５号トレンチ遺物出土状況図



第 11 図　調査区出土遺物

第２表　調査区出土遺物観察表

遺物番号	図	番号	遺構	遺物		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	部位	備考	注記
				種別	器種						
1	11	14	トレンチ1	陶器	甕				胴部	瀬戸・美濃産	1T1
2			トレンチ1	在地土器		厚さ1.3cm					1T2
3			トレンチ1	在地土器		厚さ1.05cm					1T3
4			トレンチ1	在地土器		厚さ0.8cm					1T4
5			トレンチ1	在地土器		厚さ0.6cm					1T5
6			トレンチ1	在地土器		厚さ0.85cm					1T6
7			トレンチ1	陶器		(8.2)	—	—	口縁		1T7
8	11	4	トレンチ1	土師器	坏	(7.0)	—	—	口縁	ロクロ	1T8-1
9			トレンチ1	在地土器	小鍋	厚さ0.75cm					1T8-2
10			トレンチ1	在地土器	小鍋	厚さ0.75cm					1T8-3
11			トレンチ1	在地土器		厚さ11.5cm					1T9
12	11	7	トレンチ1	灰釉陶器		(13.0)	—	—	口縁		1T10
13			トレンチ1	在地土器		厚さ0.55cm					1T11
14			トレンチ1	須恵器	坏	—	(7.8)	[1.8]	底部	末野産	1T12
15			トレンチ1	在地土器		厚さ0.75cm					1T13
16			トレンチ1	土師器	坏	—	—	—	胴部		1T14
17			トレンチ1	在地土器		厚さ1.55cm			底部		1T15
18	11	8	トレンチ1	カワラケ	皿	(11.6)	—	—	口縁	ロクロ	1T16-1
19			トレンチ1	在地土器		厚さ0.35cm					1T16-2
20			トレンチ1	在地土器		厚さ1.0cm					1T18
21			トレンチ1	在地土器		厚さ0.65cm					1T19
22			トレンチ1	在地土器		厚さ0.85cm					1T20
23			トレンチ1	在地土器		厚さ0.75cm					1T22
24			トレンチ1	灰釉陶器		—	—	—	胴部		1T23
25			トレンチ1	在地土器		厚さ0.75cm					1T24
26			トレンチ1	在地土器		厚さ0.8cm					1T25
27			トレンチ1	在地土器		厚さ0.8cm					1T26
28			トレンチ1	在地土器		厚さ0.75cm					1T27
29			トレンチ1	在地土器		厚さ0.9cm					1T28
30	11	9	トレンチ1	カワラケ	皿	(12.0)	—	—	口縁	ロクロ	1T29
31	11	5	トレンチ1	土師器	皿	(11.0)	—	—	口縁	ロクロ	1T30-1
32			トレンチ1	カワラケ	皿	—	—	—	底部		1T30-2
33			トレンチ1	在地土器		厚さ0.9cm				3点	1T30-3
34			トレンチ1	在地土器		厚さ0.9cm					1T31
35			トレンチ1	在地土器		厚さ1.1cm					1T32
36			トレンチ1	在地土器		厚さ1.0cm					1T33
37			トレンチ1	在地土器		厚さ0.55cm					1T34
38			トレンチ1	在地土器		厚さ0.85cm					1T35
39			トレンチ1	在地土器		厚さ0.6cm					1T36
40	11	1	トレンチ1	須恵器	甕	(21.0)	—	—	口縁	末野産	1T37

遺物番号	図	番号	遺構	遺物		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	部位	備考	注記
				種別	器種						
41			トレンチ1	磁器	皿	—	—	—	胴部	染付	1T38
42			トレンチ1	在地土器		厚さ0.95cm					1T39
43			トレンチ1	在地土器	焙烙	(20.0)	—	—	口縁		1T40
44	11	2	トレンチ1	須恵器	坏	—	(6.4)	[1.8]	底部	末野産	1T42
45			トレンチ1	金属製品						鉄	1TT1
46	11	18	トレンチ1	石製品	鉢	(27.8)	(19.4)	15.7		重さ[2.87]kg	1TS1
47			トレンチ1	在地土器		厚さ0.9cm			頸部	包含層	1T包含層
48			トレンチ2	陶器	甕	—	—	—	胴部	常滑産	2T1
49			トレンチ2	在地土器	火鉢	厚さ1.8cm			胴部		2T2
50			トレンチ2	在地土器	火鉢	厚さ1.3cm			胴部		2T3
51			トレンチ2	在地土器	火鉢	厚さ1.7cm			胴部		2T4
52			トレンチ2	壁土							2T5
53			トレンチ2	壁土							2T6
54	11	10	トレンチ2	カワラケ	皿	—	(7.4)	[1.2]	底部	ロクロ	2T7
55	11	15	トレンチ3	陶器	すり鉢	—	—	—	胴部	瀬戸・美濃産	3T1
56	11	17	トレンチ3	天目茶碗	碗	—	4.8	[2.1]	底部	鉄釉	3T2
57			トレンチ3	縄文土器	深鉢	—	—	—	胴部	表土	3T表土-1
58			トレンチ3	土師器	甕	—	—	—	胴部	表土	3T表土-2
59			トレンチ3	須恵器	甕	—	—	—	胴部	南比企産、表土	3T表土-3
60	11	3	トレンチ4	須恵器	甕	—	—	—	胴部	南比企産	4T1
61	11	11	トレンチ4	カワラケ	皿	—	(8.4)	[1.4]	底部		4T2
62	11	6	トレンチ4	土師器	坏	—	(7.2)	[2.5]	底部	ロクロ	4T3
63			トレンチ5	縁釉陶器	小皿	(9.0)	—	—	口縁	瀬戸・美濃産	5T1-1
64			トレンチ5	在地土器		厚さ0.9cm					5T1-2
65			トレンチ5	在地土器		厚さ0.7cm					5T1-3
66	11	12	トレンチ5	カワラケ	皿	(13.4)	—	—	口縁		5T2-1
67			トレンチ5	土師器	甕	—	—	—	胴部		5T2-2
68			トレンチ5	須恵器	甕	—	—	—	胴部	末野産	5T3
69			トレンチ5	カワラケ	皿	—	—	—	胴部		5T4
70			トレンチ5	土師器	甕	—	—	—	胴部		5T5
71			トレンチ5	土器	甕	—	—	—	胴部	瀬戸・美濃産	5T6
72			トレンチ5	瓦							5T7
73			トレンチ5	瓦							5T8
74			トレンチ5	在地土器	焙烙	厚さ1.15cm			胴部		5T9
75			トレンチ5	在地土器		厚さ0.65cm					5T10
76	11	13	トレンチ5	カワラケ	皿	—	(8.0)	[1.6]	底部	ロクロ	5T11
77	11	16	トレンチ5	陶器	甕	—	—	—	胴部	常滑産、ヘラナデ	5T12
78			トレンチ5	在地土器		厚さ0.95cm					5T13
79			トレンチ5	磁器	小壺	(9.2)	—	—	口縁		5T15
80			トレンチ5	陶器	灯明皿	—	—	—	胴部	施釉	5T16

Ⅴ　発掘調査の成果

今回発掘調査を実施した大福寺境内遺跡は、史跡小倉城跡東面の麓に所在する大福寺の下段東側広がる畑地を範囲とし、史跡小倉城跡の根小屋が想定されるような立地条件を有する。過去に２次にわたる調査がおこなわれており、第１次調査では境内法面の調査区において下層から中世の在地土器や陶器が出土し、中世段階の遺構面が確認された。第２次調査では大福寺参道南側の畑地で実施された調査区において、出土遺物としては古代の遺物のほかに中世在地土器や瀬戸・美濃産の匣鉢、天目茶碗など中世遺物も確認されており、遺構としては中世以降の集石が検出され、その下層に古代の竪穴建物跡が埋没している可能性が指摘されている。本次調査では、出土した遺物は小片で摩耗が激しいものが多かったが、過去の調査と矛盾しない内容であった。中世在地土器の小片が出土遺物のほとんどを占めるなかで、一定量の古代と近代の遺物もみられた。

遺構としては第１号トレンチから狭小な調査範囲でありながらも２条の石列で構築された側溝が明瞭に検出された。時期は共伴する遺物から中世段階と考えられる。溝幅もおおよそ一尺であり、走行方向は大福寺の現参道と弱冠ずれるが、旧参道に伴うものと想定できようか。現参道の下層に旧参道が埋没している可能性が高いが、現状ではコンクリート舗装であるため確認調査の実施は難しい。側溝に使用されている石材はチャート、凝灰岩、結晶片岩を主体とする自然石であり、いずれもすぐ側を流れる槻川から採取可能なものである点は、この側溝の構築方法を考える上で貴重な情報の一つと言える。

第２～４号トレンチにおいては、遺構は検出されなかったが中世在地土器をはじめ天目茶碗などの遺物が出土しており、少量ながら中世遺物を包含していることがわかった。第５号トレンチからは中世遺物を伴う集石が検出されたが、調査面積が狭小であったためその全容はわからず、どのような性格のものであるかは判断できない。

今回の調査は調査範囲が狭小であったが、そのような状況のなかでも中世の時期と判断できる遺構を検出することができた。検出された側溝は中世段階の土地利用状況の一端を示すものであり、本次調査の成果といえる。しかし不明な点も数多く残っているため、その全容を解明するためにも今後の発掘調査の成果に期待したい。

引用・参考文献

石川安司　2012　「町内遺跡Ⅴ」『ときがわ町埋蔵文化財調査報告』第６集　ときがわ町教育委員会
石川安司　2015　「町内遺跡Ⅷ」『ときがわ町埋蔵文化財調査報告』第９集　ときがわ町教育委員会

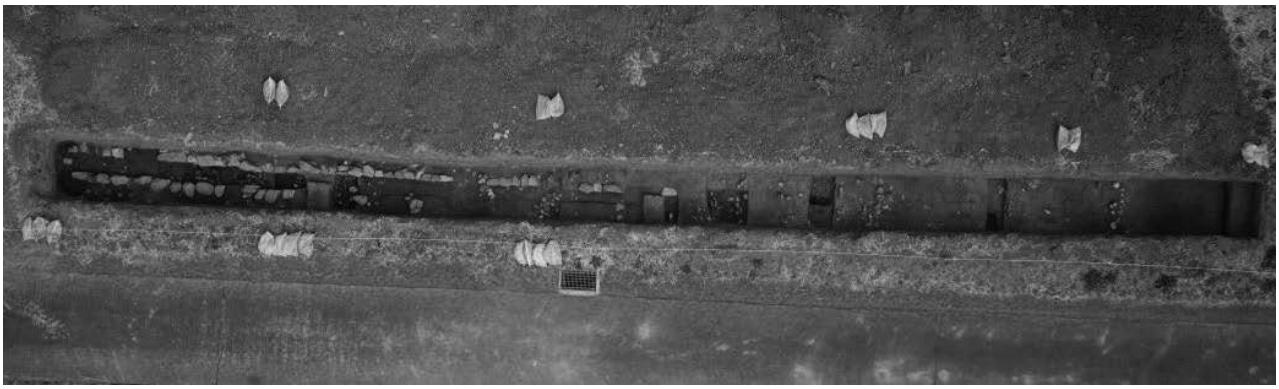
写　真　図　版

図版１

調査区遠景（東から）

調査区空中写真

図版２



第１号トレンチ空中写真

第２号トレンチ空中写真

第３号トレンチ空中写真

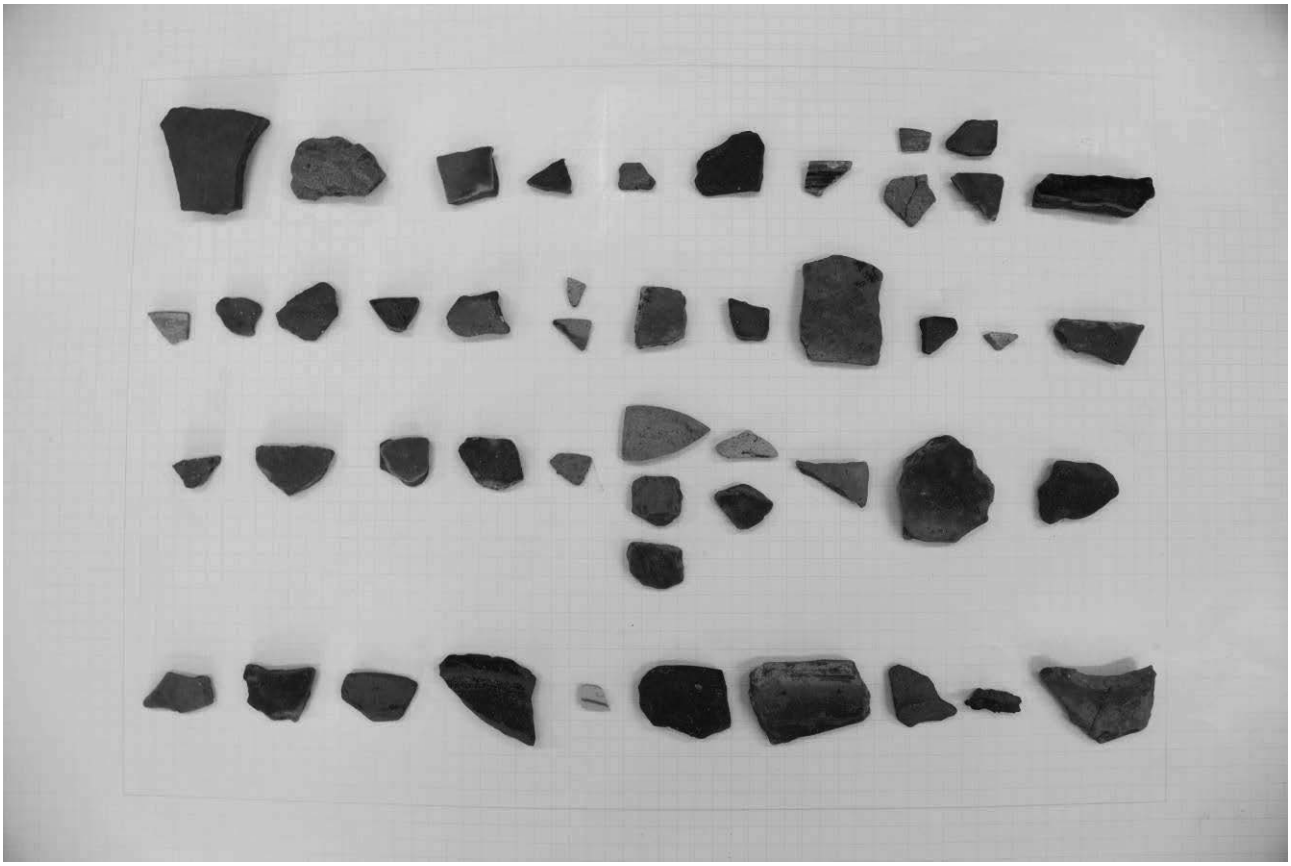
第４号トレンチ空中写真

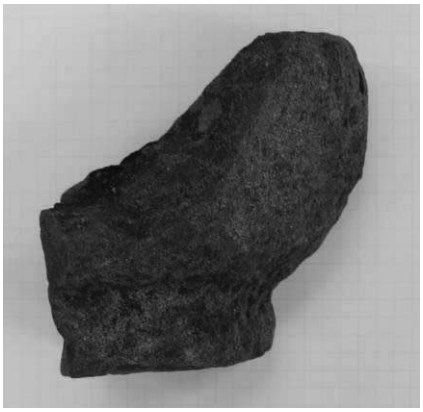
第５号トレンチ空中写真

図版３

第１号トレンチ（西から）

図版４

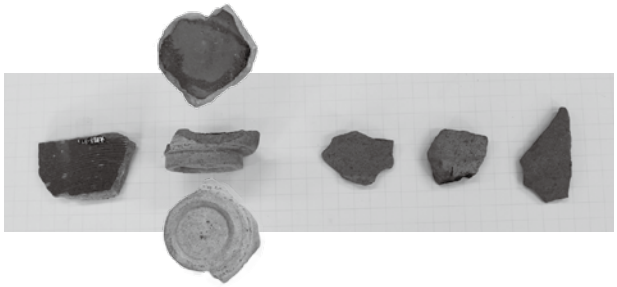




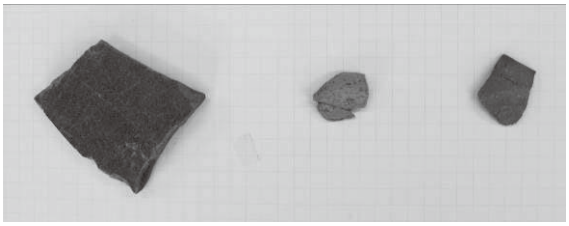
第１号トレンチ出土遺物

図版５

第２号トレンチ出土遺物



第３号トレンチ出土遺物



第４号トレンチ出土遺物

第５号トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちょうないいせき
書名	町内遺跡
副書名	大福寺境内遺跡(第３次調査)
巻次	ⅩⅡ
シリーズ名	ときがわ町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第13集
編著者	杉山拓馬
編集機関	ときがわ町教育委員会
所在地	〒355-0396　埼玉県比企郡ときがわ町大字桃木32
発行日	2019年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
だいふくじけいだいいせき 大福寺境内遺跡	ときがわまち ときがわ町 おおあざたぐろ 大字田黒 あざおぐら 字小倉	11349	41-076	36° 01'54.9″	139° 17'56.6″	20170116 ～ 20190329	50.6㎡	範囲内容確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大福寺境内遺跡	集落跡、中近世寺院、城館跡	縄文・平安・中世	側溝 溝跡	土師器、須恵器、石皿、カワラケ、中世陶器、中世在地土器	中世の石組み側溝を検出した。

ときがわ町埋蔵文化財調査報告　第 13 集

町内遺跡Ⅻ
大福寺境内遺跡（第 3 次調査）
－保存目的の範囲内容確認調査－

２０１９年3月２９日
編集・発行　ときがわ町教育委員会
印　　刷　たつみ印刷株式会社